

押し葉標本の作り方

一番大切な二つの条件

植物標本を作る目的はいろいろあるでしょうが、一般的には「どんなところにどんな植物が生えているか」を調べるためでしょう。標本はこの目的に沿うように作らなければなりません。まず「どんなところに生えているか」を調べるためには、正確なラベルが付いていることが必要です。ラベルには 採集年月日、採集場所、採集者氏名の3項目を必ず記入することが何より大切です。よく植物の名前だけを書いて、この3項目を記入していない人がいますが、植物名は書いていなくても、あとで調べることができます。しかし、この3項目は採集した本人が忘れては永久に分からなくなってしまいます。

次に「どんな植物が生えているのか」を調べるためには、その植物の名前を調べることができる標本でなくてはなりません。標本はたくさん生えている植物の中から、その種類の代表として選ぶのですから、代表の選び方が悪いと、その後調べることができなかつたり、誤った結果をもたらしたりします。種子植物の特徴が一番よくあらわれるのは花と果実で、図鑑を見ても、みな花か果実の付いた図が描かれています。そこで、採集の時には手当たり次第に採るのではなく、花か果実の付いたものを探して採ることが大切な条件となります。もちろん葉や根も必要ですから、草なら花や果実の付いたものを根から掘りとり、木だったら花や果実の付いた枝を採ればよいのです。どうしても花や果実が見つからないときは、花が咲くのを待って標本にします。若い頃と花の咲く頃とでは葉の形が変わる植物もあります。このようなものには目印を付けておいたり、庭に移植したりして両方をそろえた標本を作ると大変参考になります。逆に言うと、花も実もない若い頃のものだけでは意味がありません。また、標本を押しするのに楽だからといって発育の悪い小さなものを採ってもいけません。よく発育した立派なものを選びましょう。良い標本を作るには良い材料を採ることが大切なのです。

以上のことを要約すると、押し葉標本が備えていなければならない最低の条件は次の二つということになります。

1. 正しく記入されたラベルがついていること
2. 花か果実がついていること

ラベルの書き方

まず前に述べた3項目を書きます。

採集年月日:2005年7月20日なら、20, July, 2005, July 20, 2005, 20, VII. 2005 のように書きます。

採集場所:初めに都道府県名を書き、次に地名を書きます。いきなり小さな地名を書いても、他の人が見たときにどこなのかわかりません。「大阪府和泉市信太山」のように、知らない人でも地図で探せるように丁寧に書きましょう。難しい読みにはふりがなをつけるか、全体をローマ字書

No. _____	科 _____
学名 _____	_____
和名 _____	_____
採集地 _____	_____
採集日付 _____	採集者 _____

図 1. 標本ラベルの例. 小中学生の場合は学名の欄はなくてもよい。

きにしてもよいでしょう。このような地理的な位置のほかに、標高や、「日当たりの良い道ばた」、「スギの植林の中」というようにその植物の生えていた環境も書いておくことによりよいでしょう。栽培植物の場合はそのことも必ず書き入れます。このようにていねいに書くと、採集場所の欄は2～3行は必要になりますが、売っているラベルはどの欄にも1行ずつになっていて、実際の使用には不便ですから、図1のようなラベルを、ワープロなどを使って印刷して使うことをお勧めします。

採集者氏名：大阪花子、H. Osaka、どちらでもよいですが、H. O.のような省略はいけません。

これらに加え、標本にしてしまうと分からなくなってしまう情報、たとえば、花や果実の色、木の高さなども書き加えておくことによりよいでしょう。

ラベルにはこの他に和名、学名、科名などを書きます。これらは、標本が出来上がった後に調べてから書き入れても構いません。

押し葉をつくる

用意するもの

1. はさみ紙：新聞紙を折り目のところで切り、それを2つ折にしたもの。この間に植物をはさみます。作る標本の数だけ必要です。
2. 吸水紙：採集用具の専門店などで買えますが、高価なので古新聞で代用します(図2)。新聞紙16ページくらいを揃えて2つ折にしておきます(1ページの半分の大きさ)。ステープラーでとめておくこと便利です。1回の採集品の3倍以上の枚数が必要です。
3. 押し板：吸水紙と同じ大きさの板を2枚用意します。反り返ったりしない程度の厚みが必要です。
4. おもし：7～8kgのもの。コンクリートブロックや大きく平たい石のほかに、ミカン箱などの丈夫な木箱に小石を詰めたものも使いやすいです。

はさみ紙にはさむ

採集してきた植物は1種ずつはさみ紙にはさみます。同じ種類の小さい植物は何株かをひとまとめにして1枚のはさみ紙に入れても構いません。紙からはみ出す大きい植物はVやN、W字状に折り曲げます。大きな葉がはみ出る場合は、折りたたんでも構いません。特に大きいものは切り離して何枚か続きの標本とし、a、b、cや1/4、2/4、3/4、4/4のような記号をつけて、一続きの標本であることが分かるようにします。はさんだ植物は、葉の折れている部分をのばし、花や果実など大切な部分がよく見えるようにしましょう。あまり葉が重なりすぎている部分は必要なだけを残して切り取ってしまっても構いませんし、太い茎などは縦に半分にさいて片側だけにすると早く乾きます。はさみ紙の表にはマジックで採集場所

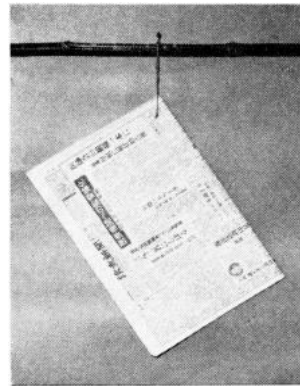


図2. 吸水紙の代用として使う新聞紙 朝刊1日分くらいを使う。ばらばらにならないようにステープラーなどでとめておき、角に穴を開けておけば紐でつるして乾かして何度も使うことができる。



図3. はさみ紙用の新聞紙にはさんで乾かした標本 新聞紙からはみ出ないように茎を折り曲げたり、大きな葉を折りたたんだりする(写真はシナノキ科のラセンソウ)

や日付、花の色、木のだいたいの高さなど、あとでラベルに書く必要のあることを忘れないうちに書いておきましょう。

吸水紙を入れ、おもしろをする(図4)

標本にする植物を全てこのようにはさみ紙にはさみますが、まず押し板を置き、吸水紙を1~2枚置きます。その上にはさみ紙を置き、植物をはさみ、必要事項を書きます。その上に吸水紙を1~2枚置き、またはさみ紙を置きます。このようにはさみ紙と吸水紙をかわるがわる重ねていきます。はさむ植物の茎が太くてごろごろするときや水分の多いときは、その前後に吸水紙をたくさんはさみます。一般に吸水紙をたくさん挟んだほうが早くきれいにできます。太い部分が1箇所に集まらないように気をつけ、水平になるように積んでいきます。30cmくらい積み上げたところで押し板をのせ、おもしろをします。あまり高く積みすぎると押ししている途中で倒れてしまいますから注意しましょう。

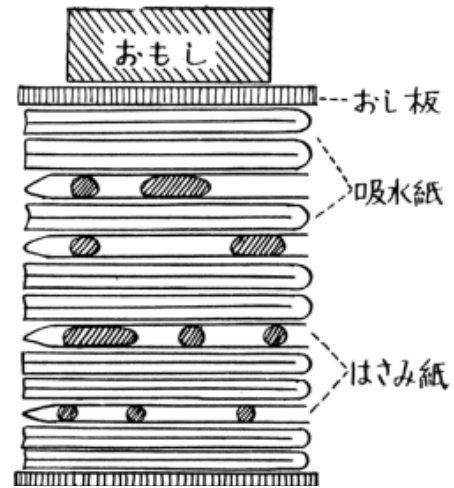


図4. 標本を押ししているところ はさみ紙は重ねず、必ず1枚ずつ吸水紙(1~2枚)と交互に重ねるようにする。

吸水紙をとりかえる

こうして一晩置くと植物の水分が吸水紙に移って紙が湿ってくるので、吸水紙を乾いたものを取り替えます。このとき、はさみ紙をそっと開いて、葉の折れているところを直したり、多すぎる葉や枝を切り取ったりして形を整えますが、はさみ紙自身は最後まで取り替えません。吸水紙の取替えはできるだけ何度もやったほうがきれいに仕上がります。特に初めのうちは1日に2~3回取り替えるとよいのですが、それができなくても少なくとも1日1回、1週間くらいたっても1日おきには取り替えなければなりません。この取替えを怠ると植物にカビが生えたり、腐ったり、葉がぼろぼろ落ちたりしてしまいます。湿った吸水紙は干して次の取替えに使います。雨が続けて紙が乾かないときは電熱器などで乾かします。植物の種類によって異なりますが、1~2週間するとかさかさに乾いてきます。どこを触っても冷たく感じないようになれば、乾きあがっています。種類によっては、どんなによく吸水紙を交換しても、黒く変色します。これはその植物の特徴ですから、失敗と思って捨てたりしないようにしましょう。また、モミ、ツガなどの針葉樹、マユミの仲間などは普通に押したのでは葉が全部落ちてしまうことがあります。葉の厚い木、茎の肉太のものなどもそのままではなかなか乾きません。このようなものはあとで述べるエタノールを使う方法を応用してください。

台紙に貼りつける

用意するもの

1. 標本台紙: A3サイズのケント紙(70kg程度)が良いでしょう。大きい紙店などに行けば手に入ります。手に入らないときは新聞半ページ大の画用紙でもよいですが、なるべく紙のざらつきの少ないケント紙を手に入れましょう。
2. のり紙: 普通の模造紙の裏に、水で濃く溶いたアラビアゴム(大きな薬局や採集用具店などで買えます)を筆で塗って乾かすと、切手のように裏にのりの付いた紙

ができます。これを細く切って、スポンジなどで濡らして植物を台紙に固定するのに使います。切手の耳紙が手に入る場合はこれを使ってもよいでしょう。セロテープ、ビニルテープなどはあとではがれてきますから、使わないようにしましょう。

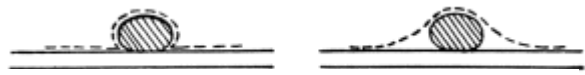


図 5. のり紙で台紙に標本を貼るときの注意
左のようにしっかり貼らないと、台紙から標本がすぐに外れてしまいます。

- ラベル: 図1のようなものに、採集場所、採集年月日、採集者氏名、その他の事項を、初めに書いた「ラベルの書き方」の注意に従ってきちんと書き込み、台紙の右下隅に貼ります。次に、乾きあがった押し葉を乗せ、要所要所を細く切ったのり紙で留めます。ピンセットを使い図5のように貼ります。太い枝などは糸で台紙に縫いつけても構いません。このときは、台紙の裏に糸が重ねて出たときに下の標本を傷めずから、糸の上からのり紙を貼っておきましょう。

採集した植物をすぐ標本にできないときの方法

旅行中の採集品や、吸水紙の取替えができないとき、冬なら数日はそのまま置いても良いですが、暑いときはすぐ腐り始めるので、次のような方法を取るときれいに仕上がります。採集品をはさみ紙ではさみ、必要事項を書いて積み重ね、十文字に紐をかけて縛ります。幅 50cm 深さ 1m 程度の大きく丈夫なビニル袋にこの束を入れ、消毒用のエタノール(薬局などで手に入ります)を注ぎかけます。束の中の新聞紙までしっかりと湿るよう十分にかける必要があります。こうして袋の口をしっかりと縛っておけば、しばらくは腐らないので、郵送したり少しの間保管したりしておくことができます。ただし、袋が破れたらエタノールが蒸発してしまいますので、刺のあるものや枝のかたいものなどは束の中のほうに入れ、外側に柔らかいものを置くようにしましょう。

標本の保存と整理

出来上がった標本は乾燥した場所に保存します。そのままではすぐに虫に食われてしまいますから、大きいビニル袋に入れ、ナフタリンなどの防虫剤を入れておきましょう。何百枚も標本が集まったら、細かい棚の付いた整理タンスを使って分類別に整理しますが、数が少ないときは産地別に袋に入れたり、洋服の箱のようなパッキング・ケースに入れておくのがよいでしょう。大切なことは防湿と防虫です。

シダ植物

大体は種子植物と同じ方法ですが、特に注意しなければならない点として以下のことが挙げられます。

- 孢子嚢群をつけたものを選ぶこと。種子植物の種類を特定するのに花や果実が大切であると同様に、シダ植物では孢子嚢群が大切です。
- 小さいものは根茎を付けて採り、大きいものでも葉の付け根から採りましょう。大きい葉の先だけ採ったのでは役に立ちません。大きな葉は何枚か続きの標本にします。
- 葉柄の根もとや根茎の鱗片を落とさないように採りましょう。この鱗片は種類を調べる大切な手がかりになります。
- 台紙に貼る時は裏向けにする。これは、孢子嚢群をよく見えるようにするためです。